国際分業の進展に伴う地域経済の変貌に関する実態分析

名古屋大学　工学部　正会員　　奥田隆明
名古屋大学　工学部　学生員　○平田　哲

1，はじめに

戦後、日本の産業は欧米諸国を追いかける立場にあったが、1970～80年代に入ると軽工業や重化学工業はアジア諸国の急激な経済成長により逆に追いかけられる立場に変化していった。さらに近年になると、機械や電化製品などの組立型産業も同様の変化をみせている。

このように日本の主力産業がアジア諸国に代わられたことによって日本の地域経済は大きな影響を受け、経済環境の変化に対応できた地域はより付加価値の高いものを生産することでその活力を維持することができたが、その変化に対応しきれず新たな産業の誘致に失敗した地域は産業の空洞化を招いた。

このような地域産業の構造変化を見ていくには、日本国内の変化だけを見るだけでなく、周辺地域の経済成長など国際経済との関連性を考えていく必要がある。そこで本研究では国際産業連関表等を用い、地域産業の盛衰を国際産業との結び付きからながめ、その変貌について実態分析を試みる。

2，基本的考え方

(1)分析方法

地域産業の変化を国際的な立場から見ていくには、国内地域の産業がどの国の産業と結びついているのかを探る必要があり、こうした産業間の結びつきの強さは国際産業連関表、地域間産業連関表を用いることで分析することができる。

そこで本研究では、まず国際産業連関表を用いてアジア諸国の生産シェアを見ることで国際経済の変貌を探る。また、日本国内の地域間産業連関表の輸出シェアを見ることにより、どの地域の産業が成長していったのかを探っていく。さらに港湾統計を用いて各地域の貿易相手国をみることで、国内地域と海外との関連性について探ることにする。

(2)分析対象

国際産業連関表は、アジア経済研究所により1975年表、1985年表が作成されている。本研究ではこの２つの表を比較することにより日本を取り巻く環境がどのように変化したのかについて分析した。このとき分析地域は、1)急速に発展を遂げてきている東アジア地域（韓国、インドネシア、タイ、マレーシア、フィリピン、シンガポール）と2)アメリカ、そして3)日本とした。なお、中国と台湾については1975年の国際産業連関表にデータがないため除外した。

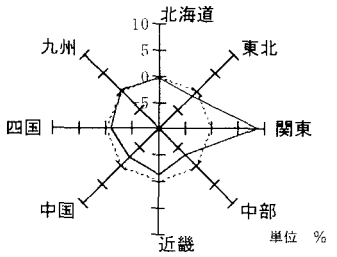
取り扱う産業としては、a)軽工業の代表として繊維、b)重化学工業として鉄鋼、そしてc)組立型産業として機械を選んだ。

3，分析結果

(a)繊維

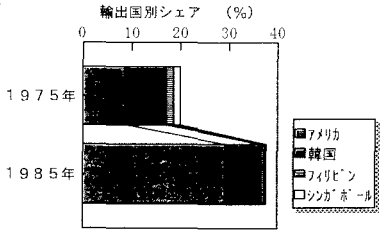
表－１　繊維産業のシェアの変化（％）

	韓国	日本	ｱﾒﾘｶ	産出計
韓国	1.83	0.05	1.35	3.28
日本	0.03	0.15	0.05	0.17
ｱﾒﾘｶ	0.04	0.02	-4.44	-4.37
産入計	1.90	0.22	-2.45	



図－１(a)　国内地域の繊維輸出シェア変化

表－１は対象地域における繊維産業の取引量のシェア（対象地域全体での取引量を100%とした）がどのように変化したのかを表したものである。75年から85年にかけて韓国は繊維の生産シェアを3.28%増加させたのに対し、日本の生産シェアはほぼ横這いであったことが分かる。また、韓国の対アメリカ輸出はそのシェアを1.35%増



図－２(a)　関東の繊維の輸出国別シェア

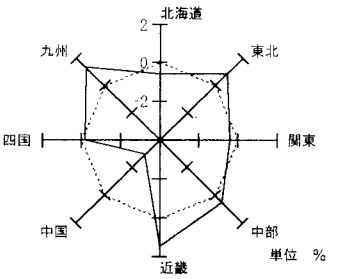
加させ、日本への輸出も0.05%増加させている。一方、日本国内での輸出シェアの変化に目を移すと（図－1(a)）、関東の輸出シェアの伸びが目立つ。そこで、関東地方の繊維に関する輸出国別のシェアを75年と85年とで比較してみると（図－2(a)）、アメリカへの輸出割合が大きく増加していったことがわかる。

(b)鉄鋼

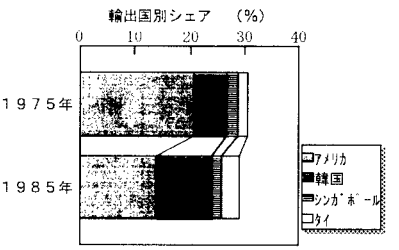
表－2　鉄鋼産業のシェアの変化（%）

	韓国	日本	アメリカ	産出計
韓国	1.88	0.09	0.20	2.21
日本	0.10	4.77	-0.27	4.58
アメリカ	0.03	0.19	-7.58	-7.35
産入計	2.03	5.18	-7.74	

日本は鉄鋼の生産シェアを 4.58%伸ばしているものの、そのほとんどが国内向けのもの（4.77%増）で、反対に海外向けのシェアは減少させており、特にアメリカ向けの値を減らしている（表－2）。これに対し韓国はアメリカへの輸出のシェアを0.20%伸ばしていることがわかる。また、日本国内の輸出シェアの変化を見てみると（図－1(b)）中国地方が大きく（2.95%）鉄鋼輸出のシェアを減らしている。そこで中国地方の輸出国別シェアを見ると（図－2(b)）アメリカへの輸出割合が大きく減少（6.9%）していることがわかる。これらのことから、韓国のアメリカ市場へのシェア拡大によって中国地方の鉄鋼産業が大きな影響を受けたことが考えられる。



図－1(b)　国内地域の鉄鋼輸出シェア変化



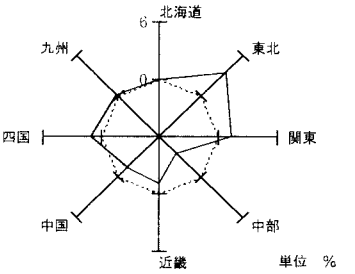
図－2(b)　中国の鉄鋼の輸出国別シェア

(c)機械

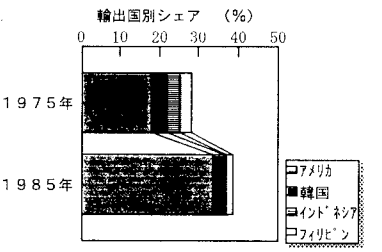
日本の機械の生産シェアは3.87%増加（表－3）しているが、これは国内向け（1.76%増）とアメリカ向けのもの（1.99%増）が大きく増加したことがその原因となっている。韓国も同様の傾向が見られるが、日本と比べるとその伸び率は小さい。他方、日本の輸入を見てみるとアメリカからの輸入も0.10%増加しており、日本とアメリカの間で水平貿易が活発化したことがわかる。国内の機械輸出シェアでは（図－1(c)）東北、関東の伸びが著しいが、東北に関しては75年の輸出量が少ないために変化が大きく現れた。関東の機械の輸出国別シェアを見ると（図－2(c)）アメリカへの輸出割合が大きく増加（15.7%増）しており、その結びつきが強くなっていることが分かる。

表－3　機械産業のシェアの変化（%）

	韓国	日本	アメリカ	産出計
韓国	1.01	0.00	0.30	1.35
日本	0.17	1.76	1.99	3.87
アメリカ	0.07	0.10	-5.93	-5.79
産入計	1.26	1.88	-3.11	



図－1(c)　国内地域の機械輸出シェア変化



図－2(c)　関東の機械の輸出国別シェア

4，結論

本研究では、国際産業連関表、国内の地域間産業連関表などを用いて地域経済と国際経済のつながりを見ながら地域産業の構造変化を分析した。これを通して国際分業の発展した現代社会では国際的な生産体制が変化する中で地域経済も大きな影響を受けてきたことを明らかにした。今後の課題としては、地域間産業連関表と国際産業連関表とを結合した分析モデルを構築し、政策シミュレーションを行うことで将来の地域産業構造の変化を予測することなどが考えられる。